

適正な学校・学級規模に関する意識の実態 <平成14年3月 国立教育政策研究所>

1 小・中学校長の適正な学校規模に関する意識の実態

学校規模別による学校長の意識について調査した結果の平均値を示した。

学校規模別の分類は、「過小（1－5学級）」「小規模（6－11学級）」「標準（12－17学級）」「大規模（18－23学級）」「過大（23学級以上）」を用いている。

	小学校長	中学校長
教職員を把握するための適正な教職員数	30名	33名
一人ひとり児童・生徒を把握するための適正な児童・生徒数	338名	373名
父母とのコミュニケーションの観点から見た適正な児童・生徒数	341名	333名
管理・運営から見た適正な学級数と児童・生徒数	12学級 334名	12学級 375名

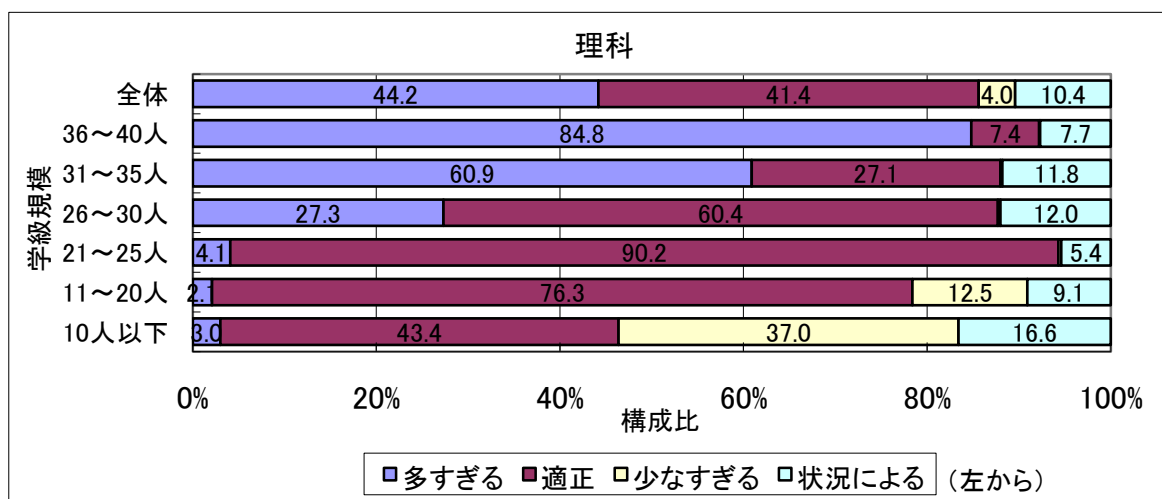
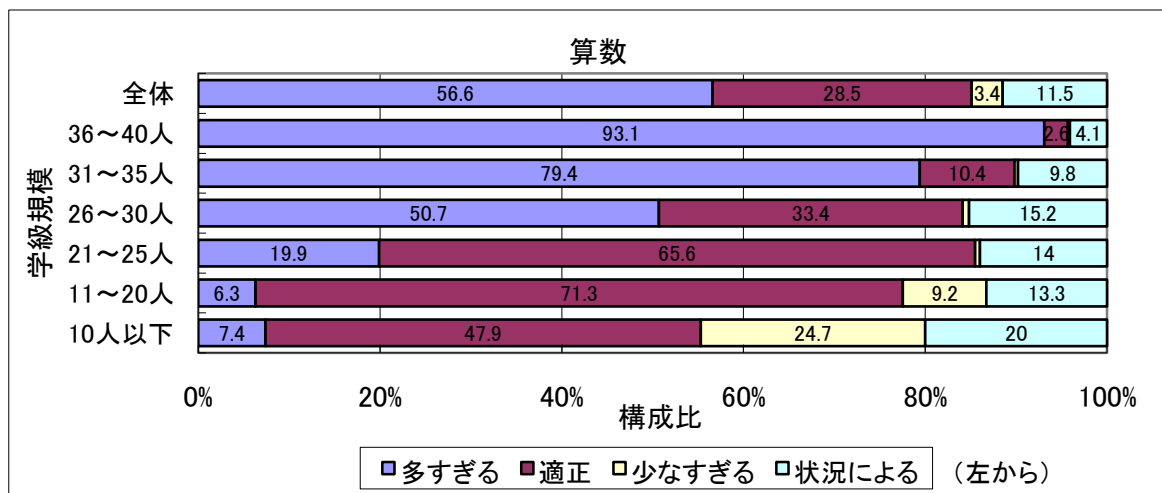
2 小・中学校教員の適正な学級規模に関する意識の実態

【小学校】

9つの教科ごとに、1学級あたりの児童数の多寡の評価を求めた。学級規模区分は、教員が担任（担当）している1学級あたりの児童数により、10人以下／11～20人／21～25人／26～30人／31～35人／36～40人の6区分を用いた。

評 価	区分	教科	回答率
だいたい適正規模であると思う	21～25人	下記を除く7教科	85～90%
		体育	76%
	11～20人	算数	約70%

「算数」を除く教科は36人以上、「算数」は31人以上になると、その指導にあたって「適正規模」と判断する教員の割合が少なくなる。



【中学校】

担当している主たる教科の1学級あたりの生徒数の多寡の評価を求めた。

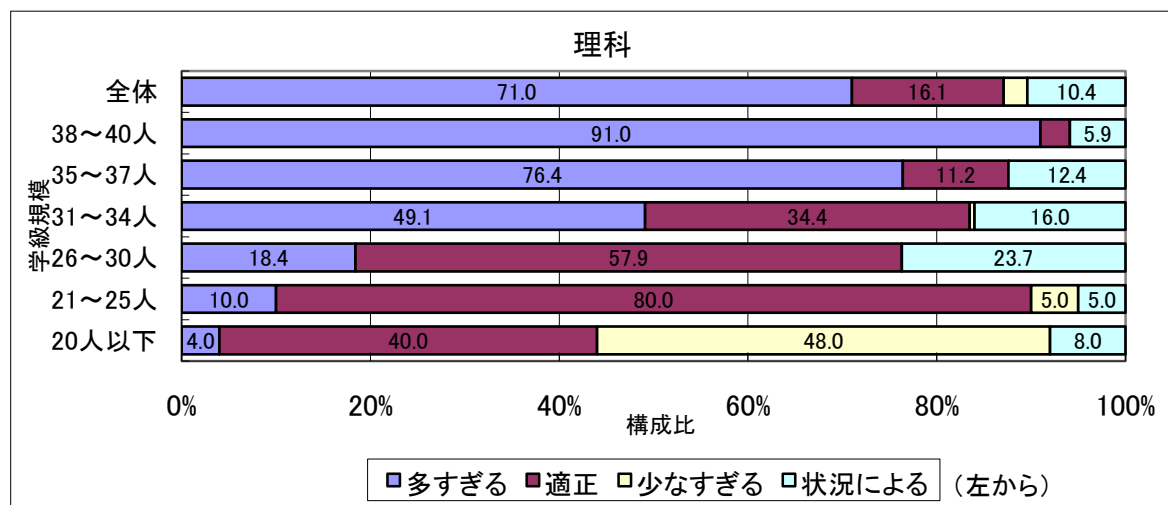
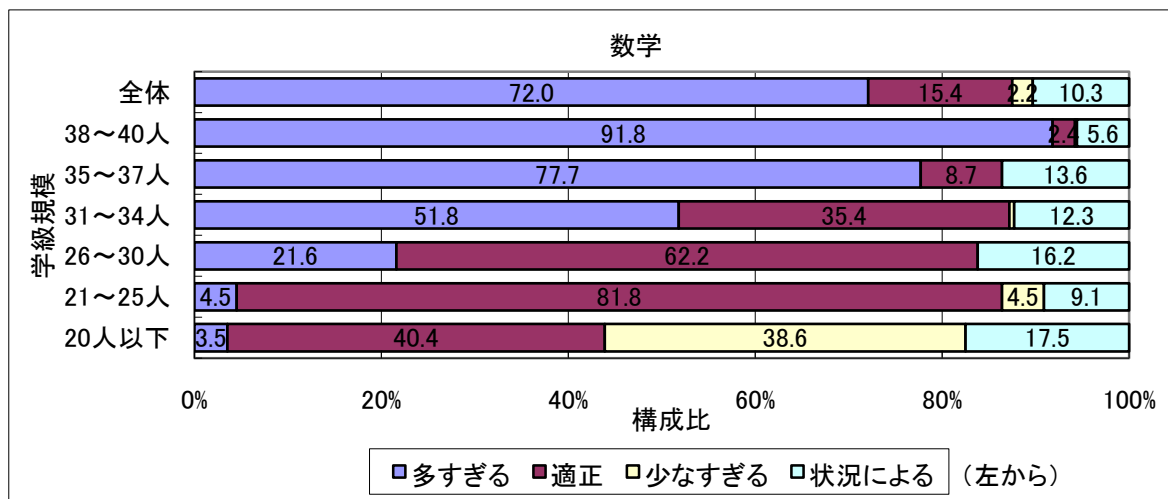
学級規模区分は、1学級あたりの生徒数により、20人以下／21～25人／26～30人／31～34人／35～37人／38～40人の6区分を用いた。

評 価	区分	教科	回答率
だいたい適正規模であると思う	21～25人	社・数・理・技家	80～88%
		英語	78%
	26～30人	国・音・美	約80%

「体育」は、「21～25人」と「26～30人」が同じ割合で、「だいたい適正規模であると思う」とした。

「だいたい適正規模であると思う」の回答率が次に高いのは、「21～25人」か「26～30人」のいずれかだが、「英語」「技術・家庭」では例外で20人以下となっている。

ほとんどの教科で、35人以上になると、「適正規模」と判断する教員の割合が少なくなるが、「音楽」「保健・体育」では、38人以上となる。

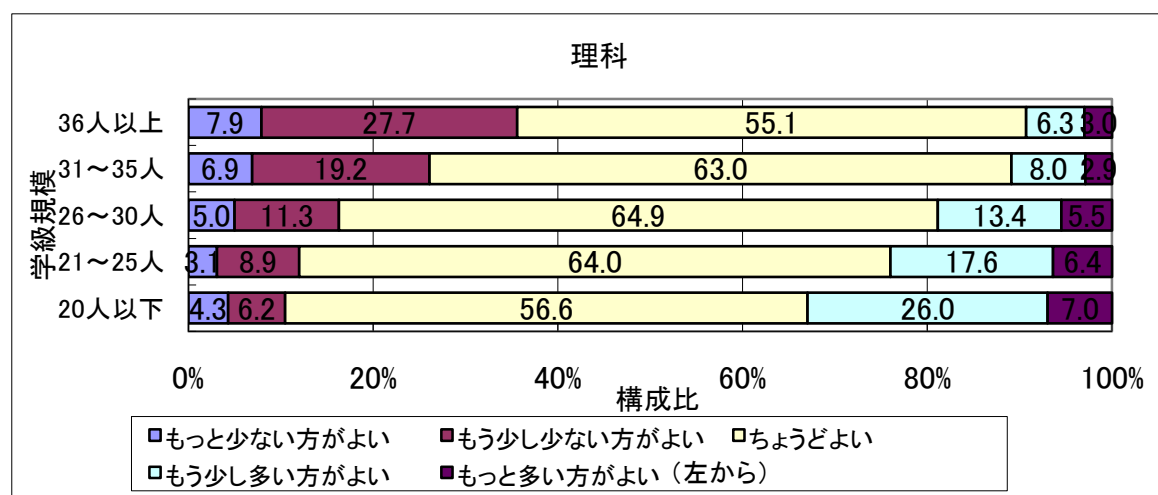
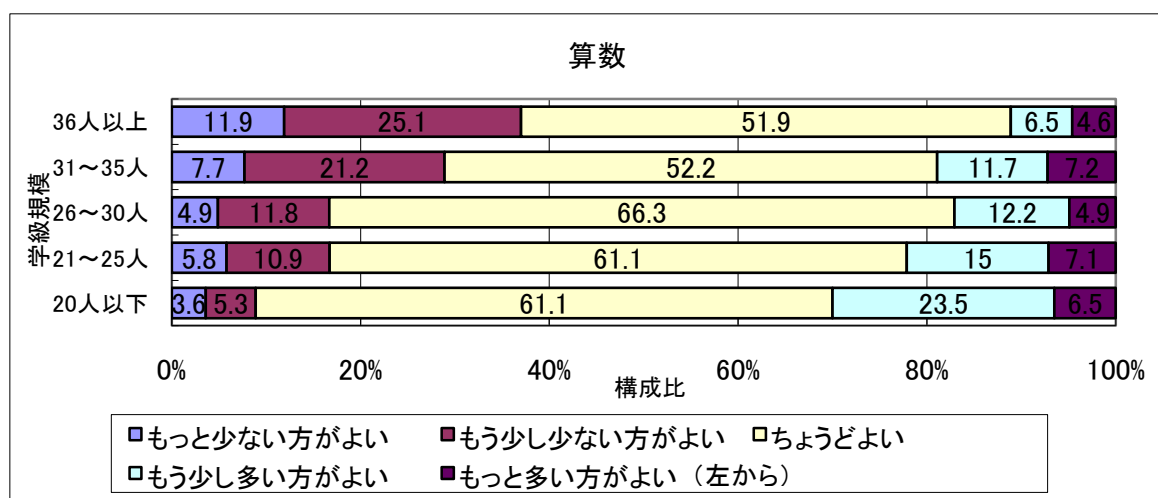


3 児童・生徒の意識調査

小学5年生と中学2年生を調査対象者として、算数（数学）と理科のクラスの人数についての評価を求めた。学級規模区分は、20人以下／21～25人／26～30人／31～35人／36人以上の5区分。

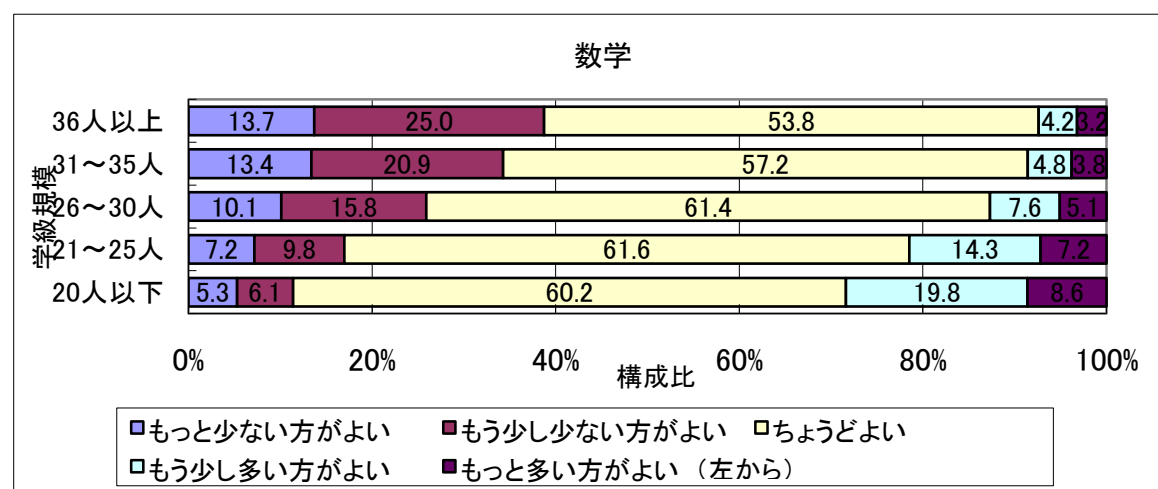
【小学生の意識の実態】

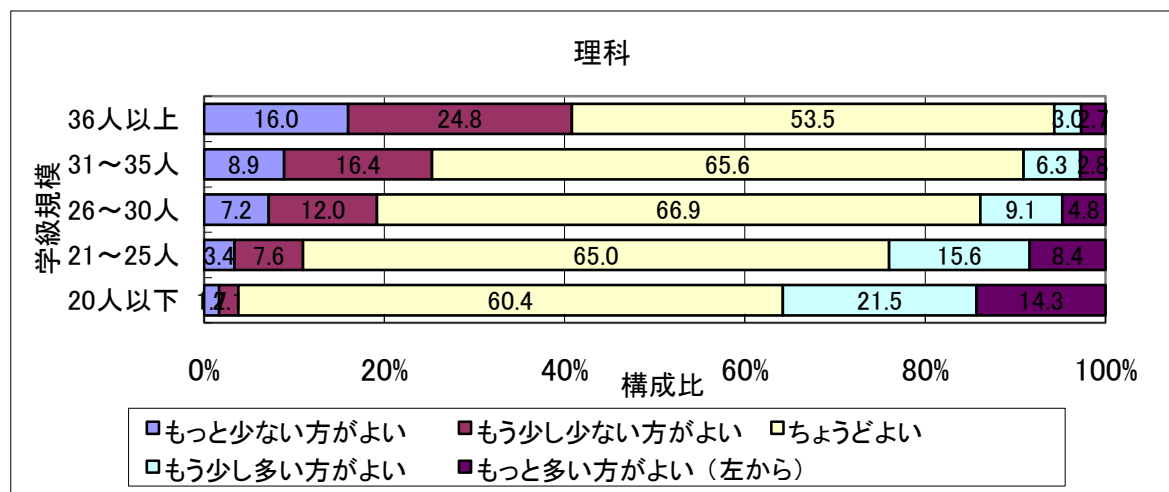
「算数」「理科」ともに、どの学級規模においても「ちょうどよい」の回答率がもっとも高くなっている。また、「算数」「理科」ともに、「26～30人」を境にして、31人以上では「もう少し少ない方がよい」の回答率が増加し、25人以下では「もう少し多い方がよい」と「もっと多い方がよい」の回答率が増加する傾向にある。



【中学生の意識の実態】

「数学」「理科」ともに、どの学級規模においても「ちょうどよい」の回答率がもっとも高くなっている。また、「数学」「理科」ともに、「26～30人」を境にして、31人以上では「もう少し少ない方がよい」の回答率が増加し、25人以下では「もう少し多い方がよい」と「もっと多い方がよい」の回答率が増加する傾向にある。





この資料は、下記のアドレスに掲載されています。
http://www.nier.go.jp/kankou_kiyou/kiyou131-0101.pdf